

実践報告

「海外フィールドワーク」における学生の学び (関西学院大学の事例から)

安居 信之^A 越野 圭美^B

Students' learning in "Overseas Fieldwork" (A case study in Kwansei Gakuin University)

Nobuyuki YASUI^A Yoshimi KOSHINO^B

Abstract: The impact of an overseas experience on student's personal growth is significant. Teachers and staffs often wonder what programs, methods and materials can be adopted in order to prepare young undergraduates to be more "globally-minded". The purpose of this paper is to clarify the students' learning in an overseas fieldwork program held in Kwansei Gakuin University, Center for International Education and Cooperation. Analysis was performed on reflections questionnaires filled out by the students who participated in fieldwork over the course of eleven days. Students who participated were from a diverse range of academic backgrounds. As a result, students learnt how to accept and respect other cultures and developed their interests and concerns through the process of getting in touch with both Japanese and local students. By introducing two different theoretical concepts; "Group Dynamics" and Allport's "Contact Hypothesis", the authors examine how learning through fieldwork influences students.

Keywords: Overseas Fieldwork, Group Dynamics, Contact Hypothesis

キーワード：海外フィールドワーク、グループダイナミクス、接触仮説

1 はじめに 一研究の背景と目的

昨今、我が国において、グローバル人材の育成に積極的に取り組んでいる大学は少なくない。2012年に文部科学省が「グローバル人材育成推進事業」を開始し、高等教育機関においては学部以外の大学関連組織が扱う国外での国際交流関連プログラムが多様化している。同プログラムは10日間から4週間程度の短期間、半年程度の中期間、1年から2年の長期間に分類されるが、とりわけ短期間のプログラムは、初年次生或いは海外渡航経験がない学生が参加することで、その後の大学生活、ひいてはキャリアプランにまで影響を与える機会となる。短期間で国外の数箇所を訪問することで共通する「海外フィールドワーク」「スタディーツアー」が代表的な科目であるが、これらの違いを理解して参加する学生が少なく、様々な科目が豊富で

あるがゆえに、学生側としてはその選択に戸惑う傾向がある。

他方、短期や中期にわたる特色ある海外派遣プログラムが、各々の大学において多数運営されているにもかかわらず、実際、教育の現場では、学生に対してどういった教育内容を、いかなる方法にて行えば、より多くの実りをもたらすのか、担当の教職員は日々、創意工夫と試行錯誤を重ねているのが実情であろう。よって本稿では、実践より得られた具体的な証左を通じ、海外における体験学習の有効性について明らかにしたい。そこからひいては、留学、海外フィールドワーク、スタディーツアー、海外インターンシップ等の企画運営に資する知見を引き出せればと考えている。

2 フィールドワークに関する国内の研究動向

フィールドワークとは、そもそも文化人類学者のマリノフスキーが調査技法として確立させたと言われ、

A: (株) 国際開発センター 経済社会開発部

B: 防衛大学校 総合教育学群

現在では文化人類学の他、地理学、社会学、経済学等、様々な学問分野においてその重要性が指摘されている。もっとも、2012年以降は海外の多様な体験活動を伴う様々な授業の1つとしてフィールドワークが登場している。このようなタイプのフィールドワークに関する研究は、海外体験学習における位置づけの確認(藤山 2011)、参加学生の学習を促す要因に着目し、学生と現地の人との関わりや学生間の相互支援を促す学習環境のデザインの重要性を指摘する研究(山本、今野、岸、久保田、2012)、リフレクションに着目する研究(村上、小川、岸 2014)、事例研究としての報告・紹介(周 2013)などがある。

フィールドワークと混同されがちなものとしてスタディーツアー⁴がある。スタディーツアーとは、「国際協力・交流市民団体(NGO)などが相互理解や体験学習を目的として行うツアー」(高橋 2008)、「実践型地域研究が目指している相互啓発による参加型地域研究」(安藤ほか 2015)、或いは「NGO(国際交流・協力の市民団体)、大学、学校、自治体、宗教団体などが、組織的かつ継続的に、相互理解や体験学習を目的として行うツアー」(藤原 2014)、「内容的には、観光のみならず、現地事情やNGOによる活動などの学習、現地の団体や人々との双方向的な交流、参加者自らの参加、体験、協力などが可能なプログラムを持ったツアー(旅行)」(藤原 2014)である。これに対してフィールドワークとは、「地勢や気候、人々が暮らしている住居や街並み、暮らしぶりなどを観察するために自ら地区を歩き、自分の五感を駆使して情報を得る地区踏査であり訪問先関係者に対するインタビューが含まれている」(清水、永井 2015)となり、参加者がインタビューを行うところに特徴がある。尚、この他にも、スタディーツアーにおいて協働学習の視点を取り入れて、参加者の学習プロセスを検討した研究などがある(尾崎、マティアス 2015)。

他方、2004年に発足した「大学教育における『海外体験学習研究会』」は、海外体験学習の対象を次の5つの要件を満たすものとしている。すなわち、

- ①学部課程で海外において実施される
- ②教育課程に組み込まれていること
- ③大学がマネジメントを行っていること(ゼミ旅行ではない)

④大学が組織的に行っていること

⑤外国語を主に学ぶわけではない

である。本稿では研究対象としている「海外フィールドワーク」は、この海外体験学習の要件にも該当するが、講義名称と統一させてフィールドワークと呼称することとする。

3 研究の対象 一関西学院大学²におけるグローバル人材育成のプログラムと「海外フィールドワーク」

3.1 プログラムにおける位置づけ

本稿で扱う「海外フィールドワーク」は、2013年度に国際教育・協力センターに設定された「実践型“世界市民”育成プログラム」の科目である。学部横断型の同プログラムには、①グローバルリーダーコース、②グローバルエキスパートコース、③グローバルシテイズンコース、の3つのコースが設定され、日本のグローバル化に貢献し、世界を舞台に活躍するために必要な教養と実践力を身につけるといった共通の目的があるが、各コースには次の異なる特徴がある。

まず、グローバルリーダーコースは、国際社会でリーダーとなる人材を育成するコースである。学生は在学中に明確なビジョンを持ち、論理的に問題解決の道筋を見出し、タフなチャレンジ精神で目標を達成することが求められており、具体的には、在学中に国連ユースボランティアをはじめとする「国際ボランティア」に参加して、現場でインターンとして任務を遂行することになる。もっとも現場でカウンターパートと共に遂行する任務については、大学で担当教員が個別にサポートすることで、事前学習・事後学習に力点を置き、学生自身のマネジメント能力も養成されることになる。

次に、グローバルエキスパートコースは、世界で専門的知識・技能を發揮できる人材を育成するコースである。学生は、在学中の交換留学などを通じて身につけた高い語学力とコミュニケーション能力を活かし、世界を舞台に専門的知識・技能をフルに發揮できる人材になることが期待されている。具体的には、学部で培う専門知識とは別に、外国語力、プレゼンテーション力、ディスカッション力をトレーニングし、海外留学によってそれらの能力がさらに実践的なレベルにまで高まることになる。

最後にグローバルシティズンコースは、国際社会で他者と協調して社会貢献できる人材を育成するコースである。学生には、多様な文化や社会に対する興味や関心を有するとともに、他者と協調して課題を解決していく責任感が求められる。在学中には多彩な国際交流プログラムで様々な文化圏の学生との交流を通じ、共にプロジェクトを作り上げて成し遂げている経験を積むことになり、最終的にグローバルなビジネス現場でも通用する調整力や柔軟性が身につくことが期待されている。

本稿が対象としている「海外フィールドワーク」(2単位・集中科目)の授業は、グローバルシティズンコースのグローバルスタディーズ科目に位置づけられ、2014年度から1年に2回(春学期にマレーシア、秋学期にベトナム)実施され、担当教員1名が引率する。現地滞在期間自体は11日間と短い、学校や孤児院、農家や工場、マーケット、現地企業等を対象にして連日インタビュー調査を行うなど、内容的にも密度の濃いものとなっている。

3.2 参加学生について

応募期間のおよそ1ヶ月前に各校舎で説明会を2回開き、参加に関心がある学生が同説明会に出席をしている。参加資格は、全学部生を対象として、①事前研修および現地訪問に参加できる者であること、②英語

で行われる講演などを理解できる語学力を有することである。3~5日間に限定される出願期間内に、インターネット上の入力、その紙面及び英語能力の証明(任意)に関する書類の提出がある。その後、書類審査に合格した学生は面接審査にて、英語力の他、フィールドワークに対する理解、熱意、日本語及び英語によるコミュニケーション能力を判定されて最大15名が選考される。学生の選考に携わる教員は、センター所属の担当教員1名および引率教員1名の合計2名である。実際のところ、主に学部の1年生を中心に、「国際ボランティア」プログラムに関心のある学生たちが、その導入的学びと経験を深めるために参加してくる人が多い。

3.3 タイムスケジュール： 夏季(春学期)実施の例

(1) 全体概要

全体概要を関係者別にタイムスケジュールとして表1に示す。学生(参加者)は訪問前後の全てにおいて過密なスケジュールをこなす。春学期のグループワークを通して対象国を調べつつ、現地での調査テーマを決め、実際に行うインタビューの準備を行う。いわゆるチームビルディングのステージである。また訪問後に学びの成果をアウトプットする期間がほぼ3か月続き、学んだ内容を定着化させることになる。

引率教員は春学期前に協力大学に対してプログラム

表1 全体のタイムスケジュール例

		各関係者						
		実施大学				協力大学		
		学生 (参加者)	学生 (前年度 参加者)	引率教員		職員	職員	学生
対学生	対協力大学							
現地 訪問 前	2月 3月	応募の検討		事前研修への協力打診	プログラム調整	日程案調整		
	4月	・説明会に参加 ・応募書類の作成 ・面接の準備		・説明会へ参加 ・応募書類審査 ・面接の実施		・説明会調整・実施 ・参加合格者発表 ・旅行会社等への調整		
	5月	・面接への参加 ・合否結果の受理 ・事前研修の準備		事前研修の準備	訪問先計画の打診			
	6月				モニタリングの調整	参加手続きについて学 生へのフォロー		
	7月	事前研修への参加	事前研修への ボランティア	事前研修の実施	・訪問先のモニタリング ・事前合宿の実施		・訪問先の調整 ・学生ボランティアの要請	
現地	8月	事前研修(合宿)後に訪問					現地で参加	
現地 訪問 後	9月	小冊子データ提出		小冊子の精査	報告書の受け取り		報告書の送付	
	10月	・校正(1~3校) ・HP作成開始		・校正の指導 ・HP作成指導		小冊子作成会社の調整		
	11月	・小冊子完成 ・HP公開						

表2 事前学習・活動の内容例

回数	月	日	曜日	場所	時間	ねらい	内容	備考
1	6月	18日	土曜日	学内	9~15時	フィールドワークの理解	自己紹介、グループ分け、担当分野の選択、協力大学の紹介、フィールドワークのテーマの説明	
2	7月	2日				マレーシアの理解	担当分野(①政治・経済、②労働、③教育、④歴史・文化、⑤環境)のプレゼン及びバスセッション、インタビュー場所の選択	海外保険・旅行会社の説明会も含む
3	7月	9日						・前年度の参加者によるプレゼン ・協力大学への派遣者によるプレゼン
4	8月	3日	水曜日	学外 (キャンプ場)	終日	問題発見	・振り返りシートの書き方 ・インタビューの練習(英語)	バーベキューの実施
5		4日	木曜日				英語によるロールプレイ	安全管理・危機管理研修も含む

の調整を行い、春学期の事前研修を実施しつつ訪問先への打診、モニタリングの調整・実施をする。職員も同様に、引率教員から共有される情報を基に日程調整、事務手続き等を行う。なお、協力大学の職員が実施大学からの要望や現地での経験に基づき、訪問先等を調整するのは現地入りの1か月前である。

(2) 学習スケジュールについて

参加学生の学習・活動内容は、①事前(5回)、②現地(10日)、③事後(数回程度)の3部構成となっており、各内容・期間は担当教員により各年度で若干異なっている。

・事前学習・活動(5月~7月)

表2は2016年度春学期(マレーシア研修)における事前学習・活動の内容である。特に訪問先でのインタビューが円滑にすすむことを考慮し、第2回および3回では、異なる学年や学部で構成されるグループ(1グループ:3名)ごとに、担当分野の発表を行い、他のグループに不足している知識を互いに充足することを促した。また、過去の参加者アンケートの内容を踏まえ、全回を通して参加者の個別勉強会(基本的なマレー語の学習、情報収集のあり方、インタビューの技法、フィールドノートのとり方)の他、第4回及び5回では学外(大学関連施設)での合宿を実施し、知識を補充することの他、参加者のコミュニケーションを図った。

・現地学習・活動(8月)

インタビューする際には、グループの仲間とともにさまざまな失敗を繰り返しながらも、それぞれの担当

責務を全うし、さらに終盤には、調査活動のまとめとして、活動全体を振り返りながら関係者に対して英語でプレゼンテーションを行う。グループワークの集大成としてのプレゼンテーションの機会は学生たちにとっては、いわば最終試験の場でもあり、まさに真剣そのものである。なお、現地活動期間中は、学生は毎日、振り返りのためのミーティングを行い、振り返りシートを作成・提出する。

・事後学習・活動(9月~)

参加後に、学生が編集委員となり成果物(A5版の小冊子)を作成する。尚、2016年度は無料のホームページ作成ツールを利用し、冊子の中身と同内容のホームページを作成した。さらに、希望者のみ、フィールドワークの期間内に撮影した写真を使用し、国際協力機構(Japan International Cooperation Agency: JICA)が主催する『グローバル教育コンクール』(毎年夏から秋に実施)に参加した。

4 学生たちの学びへの考察 —実践と理論の繋がり

体験学習に主眼を置くこの授業の特徴としては、フィールドワークを通じて、以下の2つの学びを得ることが挙げられる。

①日本人学生間における相互の学び

②現地大学生集団との関わりを通じた学び

この2つの協働的活動を通じた学びに対応する形で、以下の2つの理論的な裏付けを仮定する。

(a)グループダイナミクスによる協働学習効果

(b)オルポートの「接触仮説」に基づく異文化間教育効果

4.1 日本人学生間における相互の学び —グループダイナミクスによる協働学習効果

まず第一に、このフィールドワークは現地では、個々に振り返りシートと呼ばれる日報にまとめるだけでなく、インタビューや観察を通じて見聞きしたことについて、毎日「振り返り」の時間が設けられている。教員のファシリテーションのもと、互いに思ったことや感じたことを率直に言い合うことで、新たな気づきを得たり、影響を及ぼし合ったりする工夫がなされている。以下に、事後アンケートに寄せられた学生たちの声を引用する。

【「振り返り」を通じた学び】

- ・毎日訪問先から帰って、すぐにみんなで「振り返り」をすることで新しい発見も多々ありましたし、11人各々で見る角度が違い、11人それぞれ違った意見を持っていることに気付きました。同じものを見ていても感じ方が違っていたり、同じ場所に行っている自分も気付かないところに気付いているメンバーがいたりしてチーム内で勉強になることがとても多かったように感じます。(マレーシア参加者)
- ・メンバーそれぞれが気づいたことを言い合う場として、「振り返り」の時間があったのはとてもよかったと思います。だんだんとインタビューの仕方が上手くなっていったし、各個人の良い所や立ち位置が分かってきたので、本当に「振り返り」の時間は大事だと感じました。(マレーシア参加者)
- ・「振り返り」の時間でも、それぞれの見解とさまざまな着眼点から多くのことを学ぶことができました。このようにお互いの意見を真剣に言い合える雰囲気をつくること、そしてそのような時間を毎日しっかりと設けることで、今回一緒にマレーシアに行ったメンバーの深い思慮や自分自身の学びを個人の学びにとどまらず全体の学びにつながっていったと思います。(マレーシア参加者)

相互に想いや意見を交換し合うことで、新たな発見に気付くことができ、また現地の人々への聞き取り方法の良かった点や悪かった点をお互いに指摘し合い、翌日以降のインタビューに生かすという意味でも有意義な時間となっている。フィールドワークの活動を通

して、日本人学生間で多様な意見や考え方を共有し合い、自ら考えることで、学びの深化がなされるのである。これは「グループダイナミクス (Group Dynamics)」に基づく協働学習の効果と考えられる。

グループダイナミクスとは、集団力学とも呼ばれ、クルト・レヴィンに端を発する学問領域として、集団及びそのメンバーの行動に関して、社会心理学的にアプローチするものである。この延長線上には、例えばジョンソン兄弟らによる集団内相互作用に基づいた協同/協働学習にかかる実証研究などが位置付けられる(ジョンソン他 2001、ジョンソン他 2010)。

また大学の4年間という時間は、社会に出る前の準備期間である。その1年目に、同じ大学内の意識の高い学生に出会えるのも、この授業に参加する意義の一つでもある。そのことで今後の大学生活のモチベーションを上げるきっかけにもなる。

【仲間からの影響】

- ・一番大きかったのは周りの「仲間」からの影響で、みんなそれぞれの鋭い観点から意見や質問を考えていて、それらに毎日触れていると自然と私もみんなに追いつこうと必死で考える力がついてきました。(マレーシア参加者)
- ・ドミトリーで1階のフロアー(談話エリア)に行けばいつでもみんなに会えて、考えたことをシェアできる、それが一番良かったと思います。自分ひとりで考えていても、一人の考えだから煮詰まってしまうこともあるけれど、誰かと話すことによって違う見方ができ、大変濃い11日間でした。(マレーシア参加者)
- ・インタビューについて複数人と一緒に考えることで、違う意見を聞き、それを自分の中に取り込み、改めて違う視点から考えることができました。(マレーシア参加者)
- ・(仲間となら)一人ではあきらめてしまいそうなことにぶつかっても、あきらめずに協力して乗り越えられる。(ベトナム参加者)

その上で、自分の中の変化に気づき、さらなる学びへの意欲を形成することに繋がっていくことになる。

【主体的な学びの継続】

- ・この研修では何をインタビューするか、最終プレゼ

ンでは何を発表すれば良いかといったことを、(チーム毎に) 自分たち学生が決めなければならないので、自ら考えて行動する能力が非常に上がったと思う。(ベトナム参加者)

・疲労もたまりきった最終日に、みんなでプレゼンテーションを作り上げることはとても大変だったが、自分のこれからの大学生活に対する意識が変わった。(マレーシア参加者)

このように、グループダイナミクスとして協働学習の効果が参加者間に発現し、グループワークを主体とする日本人学生間における相互の学びが形成されていくものと推測される。

4.2 現地大学生集団との関わりを通じた学び — オル

ポートの「接触仮説」に基づく異文化間教育効果

第二に、このフィールドワークのもう一つの特徴は、現地の学生と密接にかかわる時間が設けられている点にある。学生たちのこの学びのプロセスを理解するには「接触仮説 (Contact Hypothesis)」の考えを援用するとわかりやすい。この仮説は、ゴードン・W・オルポートが唱えたもので、「特定の条件下において異なる集団間のメンバーが接触することによって偏見の解消をもたらす」という仮説である (オルポート 1961)。後にブラウンが、この仮説を基に、集団間の偏見や差別を軽減する方策として、異なる集団に属するメンバーを混成したグループワークの手法が有効であると指摘している (ブラウン 1993, ブラウン 1999)。またドイツは、建設的な紛争解決には、ある共通目的をゴールとする集団間の協力が資するとも述べている (ドイツ 1995)。本授業に参加した学生たちの異文化理解の深まりは、これら理論が裏付けるところの異文化間教育効果によるものと推察される。以下、再び学生たちの声を引用する。

【同世代との交流 (その1)】

・ベトナムの学生とたくさんかわれたのが、とても有意義でした。言いたいことがうまく伝わらない経験や、異文化にぶつかる経験もさることながら、異国でインタビューするという一見かなり難しそうなことが、楽しく行えたのは、ベトナムの学生たちのおかげ

である。(ベトナム参加者)

・現地の大学の学生とともに 10 日間過ごしたことによって、ベトナムの文化だけではなく、同世代だからこそ分かり合える内容 (流行や音楽など) の話がたくさんできた。(ベトナム参加者)

・多くのマレーシアの学生と触れ合う中で、マレーシアの歴史、文化、多民族、差別、インタビューの担当場所についての知識などを集めることもできた。(マレーシア参加者)

・(マレーシア側の現地の) 優秀な学生達と関わるうちに、自分のこれからの勉学に対するモチベーションもより一層高まりました。グローバルに日本が戦うにはこのような学生達と肩を並べなければいけないのかと思ひ、勉強に励もうと思ひました。(マレーシア参加者)

互いに英語でコミュニケーションしながら、通訳としてインタビューに同行し、食事と一緒に取るなど、常に行動を共にすることで、仲間意識も生まれ、互いに触発されていく。そして、その過程で、現地の学生の積極的な姿勢や意識の高さに刺激を受ける日本の学生も少なくない。

【同世代との交流 (その2) — 寝食を共にする経験】

・自分たちと同年代のベトナム人の学生達と交流できたこと。一緒に寝食を共にすることで、価値観の違い、国籍は違うけど、やっぱり同年代だなと感じる部分などを実感できた。(ベトナム参加者)

・現地のベトナム人大学生と常に行動し、寝食も共にすることができたことが最も有意義だと感じた。なぜなら 10 日間という短い期間でベトナムの社会を知ることが非常に難しいことだが、(ベトナムの学生) の普段の振る舞いやコミュニケーションを通じて、ベトナムとは一体どういう国なのかということをよく知ることができた。(ベトナム参加者)

・同世代の学生と共に寝泊まりすることで、うわべだけではなく、ベトナムのことはもちろん、企業や経済、日常について思っている本音まで聞くことができたのが良かった。(ベトナム参加者)

このように現地の大学生集団との密接な関わりが、異文化間の交流による協働作業という形で、「接触仮説」

に基づく教育効果として参加者間に発現するものと考えられる。

5 むすび

5.1 まとめとして

フィールドワークの本来の目的は、インタビューを通して調査対象の社会、文化、歴史、空間、集団全体を理解して自らの研究テーマ等に結び付けて考えていく力を身につけることである。学生たちのコメントからも、フィールドワークでの経験が個々の学生にとって何らかのインパクトをもたらし、自ら考える力を醸成したのは疑うべくもない。

他方、海外体験学習プログラムとしてのこの授業の狙いは、表向きには現地でのインタビュー調査活動を通じて、実践的なフィールドワークの手法を身につけるものとなっているが、実はその裏にある真の狙いは、上述の2つの学びのアプローチ、すなわち

- ①日本人学生間における相互の学び
- ②現地大学生集団との関わりを通じた学び

を踏破することで、集団内及び異文化間の双方において、協働的活動による学生間の相互作用としての学びを享受することにある（以下の図1参照）。事後アンケートにおける学生の満足度は総じて高い。そのことから、この授業が取り入れているアプローチは、海外体験学習プログラムにおける学びの充実化を実現し、ひいてはプログラムを成功に導く必要条件を示しているものと言えるのではないだろうか。

5.2 今後に向けて

まず引率教員として現場で細心の注意を最もはらわなければならないことは何より、安全管理および危機管理である。学生の学びのために自主性を高めることも必要であるが、昨今、アジア諸国においても、一般人が巻き込まれる同時多発的なテロ等が発生するなど、如何に安全管理および危機管理を万全に確保していくかは、今後の課題となる。訪問期間がイスラム教のラマダン期間と重なることを回避する等の大学側が出来ることに万全を期す他、やはり参加者である学生においても、一人ひとりが危機意識を高めることは重要である。

また、フィールドワークの地域の選定については、引率教員の研究や経験が豊富な地域が選定される傾向にあり、地域の特殊性とフィールドワークを通しての学びの関係からは十分に検討されているとは言い難い。参加者たる学生が、参加決定直後を皮切りに、事前学習、現地学習、事後学習、その後の大学における海外経験等々、自ら学びを膨らませ、貴重な経験知を積み重ねられるよう、今後さらに工夫が必要であろう。

グローバル化が促進し多様な価値観が混在する現在、今後ますます、全く異なる他者を理解して受入れ、連帯して生き抜く能力が必要とさせる時代となるであろう。その一方で、日々瞬時に行き交う膨大な事実や情報について盲目的に受け入れずに、様々な観点や立場から物事を捉えて自らの力で判断をなし、行動していくこともまた求められる。「海外フィールドワーク」に参加した学生が、これらの必要性や要求される資質の形成に如何に寄与しているか、今後、検証することも求められるであろう。

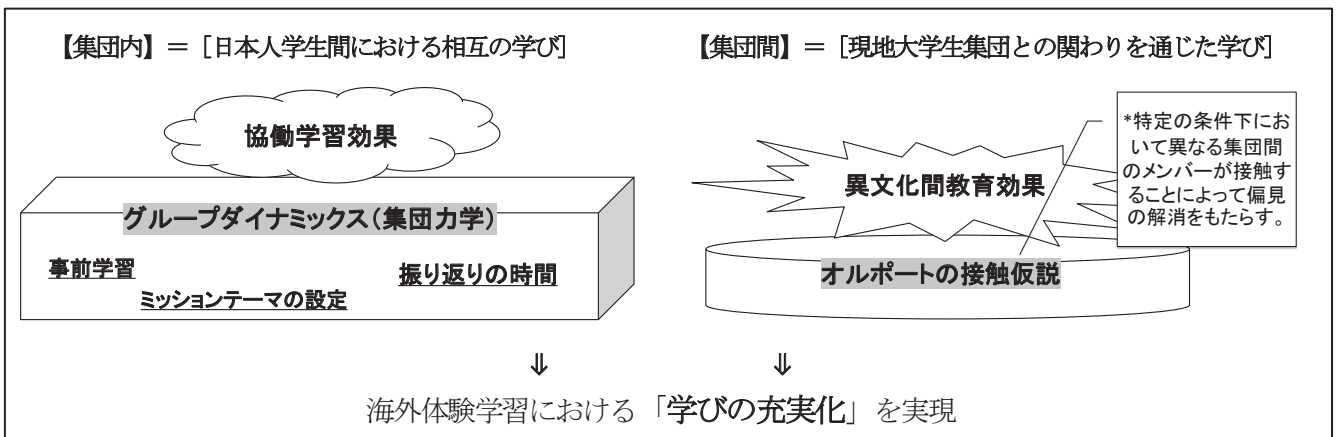


図1 協働的活動による学生間の相互作用

注

- [1] スタディーツアーの概念全般に関しては、他にも例えば林 (2010) などが検討している。
- [2] 本稿の内容は、あくまでも筆者個人の見解によるものであり、従って関係するいかなる組織・団体のそれを代表するものではない。尚、同大学は「グローバル人材育成推進事業」(GGJ) (42 大学が採択) およびスーパーグローバル大学 (SGU) (37 大学が採択) にともに採択されている。

引用・参考文献

- 1) 藤山一郎. (2011). 海外体験学習による社会的インパクト (大学教育におけるサービスラーニングと国際協力活動). 立命館高等教育研究, 11, 117-130.
- 2) 山本良太, 今野貴之, 岸磨貴子, 久保田賢一. (2012). 海外フィールドワークにおける学習を促す要因の検討 (協働する他者との関わりに注目して). 日本教育工学会論文誌, 36(Suppl.), 213-216.
- 3) 村上正行, 小川治子, 岸磨貴子. (2014). 海外フィールドワークにおけるリフレクションのデザインと有効性. 日本教育工学会論文誌, 37(Suppl.), 153-156.
- 4) 周星. (2013). 大学教育における海外フィールドワーク. 文明 21, 31, 41-53.
- 5) 林加奈子. (2010). 開発教育としてのスタディーツアー再考 (省察と行動の視点から). 開発教育, 57, 183-198.
- 6) 高橋優子. (2008). スタディーツアーの教育的意義と課題 (JICA カンボジア事務所での経験に基づいて). 筑波学院大学紀要, 3, 149-158.
- 7) 安藤和雄, 坂本龍太, 石本恭子, 谷悠一郎, 木下広大, 高島菜芭, 高浜拓也, 福田睦, 宮本明德, 諏訪雄一, 長澤勇貴, 森田椋也, 柳原志穂, 酒井肇. (2015). 相互啓発実践型地域研究としての京都大学国際交流科目「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」現地スタディーツアー報告. ヒマラヤ学誌, 16, 42-65.
- 8) 藤原孝章. (2014). 特定課題研究プロジェクトについて (特集 海外研修・スタディーツアーと国際理解教育). 国際理解教育, 20, 36-41.
- 9) 尾崎司, ランブレヒト・マティアス. (2015). 協働学習を取り入れたスタディーツアーの可能性 (異文化間の学習プロセスに関する事例研究). 東京家政大学研究紀要, 55(1), 11-22.
- 10) 大学教育における「海外体験学習研究会」: <http://joeln.jp/concept/> (2019年6月参照)
- 11) ジョンソン, D.W., ジョンソン, R.T., スミス, K.A. 著, 関田一彦監訳. (2001). 学生参加型の大学授業: 協同学習への実践ガイド. 東京: 玉川大学出版部.
- 12) ジョンソン, D.W., ジョンソン, R.T., ホルベック, E.J. 著, 石田裕久, 梅原巳代子訳. (2010). 学習の輪: 学び合いの協同教育入門. 大阪: 二瓶社.
- 13) オルポート, G.W. 著, 原谷達夫, 野村昭訳. (1961). 偏見の心理. 東京: 培風館.
- 14) ブラウン, R. 著, 黒川正流, 橋口捷久, 坂田桐子訳. (1993). グループ・プロセス: 集団内行動と集団間行動. 京都: 北大路書房.
- 15) ブラウン, R. 著, 橋口捷久, 黒川正流編訳. (1999). 偏見の社会心理学. 京都: 北大路書房.
- 16) ドイツ, M. 著, 杉田千鶴子訳. (1995). 紛争解決の心理学. 京都: ミネルヴァ書房.

受付日 2019年7月7日、受理日 2019年9月14日